東千田キャンパスを記録する

←授業風景

小竹：「中石君、地学実験はGOODだね。」
中石：「そうだね。」
三宅：「私はまだ、来ていません。」
田島：「三宅は来んのう。」
津島：「ムニャムニャ。」

総科ロビー→

新学期になると、このロビーは溜まり場と化し、大混雑する。ちなみにロビーの絵は約20年前、学校教育学部・小学校教員養成課程松本百合子さんにより寄贈され、当初105号室の前に展示されていたが、平成2年度、現在の位置に展示された。

←自転車置場

広島市内を行き来するにはバイクよりも市電よりも自転車が機能的だ。その結果、朝夕の広大周辺、森戸道路はさながら北京である。

西条キャンパスでは自転車が自動車におきかわるのかと思うとちょっとこわい。

←コンテナ

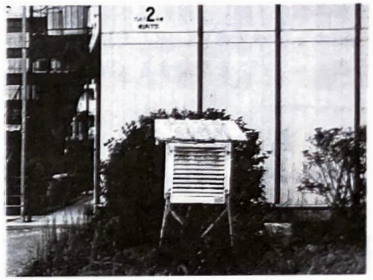
旧国鉄の払い下げを改造（改築？）して実験用に仕上げた建物（？）で、このペンキの色（エメラルドグリーン）ゆえに大きな存在感を持っていた。まさに「住めば都」だろう。某雑誌にも載ってしまったコンテナ教室。電線が引っ張られているのが分かるかな？
（プレハブ1号棟・2号棟の間）

グラビア案内

今年度でいよいよ東千田キャンパスともお別れである。総合科学部が成立し約20年の間にたくさんの出来事があった。大勢の人々の様々な思い出が染み込んだこのキャンパスを、いろいろな形でカメラにおさめて記録してみた。目前に迫る西条移転を前に、しばし東千田キャンパスを振り返ってみよう。

百葉箱→

プレハブ二号棟の前にこの百葉箱はぽつんと立っている。温度計や湿度計などが入れられ、気象観測に使われるが、白ペンキのはげ具合や、金属部分のサビ具合が、歴史を物語っている。



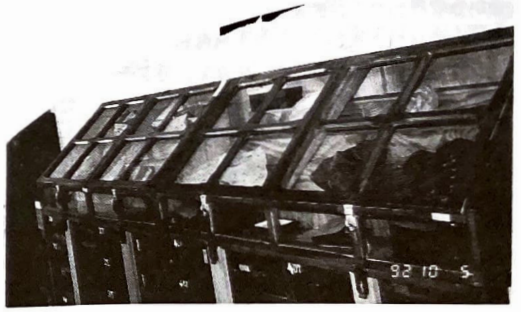
地学標本↓

地学講義室の後ろと横の廊下にずらりと並ぶ標本陳列棚の中の岩石や鉱物を、学生諸君がよくのぞき込んでいるのを見る時、私は大変うれしく思う。

総合科学部の地学系は、原爆被災を免れた、教育用の岩石と鉱物標本を蔵しているが，その量と質において、たぶん広島大学随一であろうと思う。これらの標本の大半は、今は知る人ぞ知るベーブ先生（故鈴木正利教養部長）が、旧制広島高等学校時代に長い年月をかけて集められたものである。現在では入手困難な貴重な大陸産の標本が沢山ある。教養部時代から総合科学部のはじめ頃にかけて、名誉教授の多井先生と私とが、このベーブ標本に古生物標本を少し追加した。総合科学部に改組される際、大学設置審議会委員の一行や、飯島広島大学学長、故今堀学部長などが、学部の財産としてわざわざ視察にこられた。

総合科学部になって、スペースが著しく不足し、かけがえのない大切な標本は標本室からとうとう廊下へ出される仕儀になった。出されてからはや17年、新校舎では元のように標本室に配置される予定である。標本よ、長い間、廊下でご苦労様でした。

（自然環境研究コース教授
佐田公好）



1992年12月24日

飛 翔

第 44 号

表紙：南場千里＋中越信和
目次：村田雅洋

特 集

さようなら東千田キャンパス

歴代学部長の座談会 …… 1

総合科学部の「匂い」は何処へ：洲崎敏伸 …… 9
東千田キャンパスの思い出：大村　尚 …… 10
東千田キャンパスを記録する〈写真特集〉 …… 12

総合科学部新館　正面左側

森戸道路の
にぎわい

新館横の
自転車置場

テスト中の風景（大講義室）

こんにちは西条キャンパス（移転特集）

東広島市・西条情報：移転先あれこれ：吉村慎太郎 …… 18
歓迎・総合科学部移転：宝積良忠 …… 22

教官職員のエッセイ

思い出：小林　惇 …… 24
総科教師失格の記：頼　祺一 …… 25
シルクロードの町・トルファン：塚本英子 …… 27

学生のエッセイ

人・河川・愛：古木二郎 …… 28
大山巡検を振り返って：中村友紀 …… 30
南の国から'92：平野裕次 …… 32
スペイン人が見たバルセロナ・オリンピック
：アルフレッド・アンドレース・ラザロ …… 34

社会からの声
難問！総合科学部って、何をするところですか？
：生谷武寛 …… 35

小　説
野心の果てに：中島美紀 …… 36

退官・新任紹介 …… 40
追悼　故今堀誠二先生 …… 43
学部記事 …… 44
読者からの手紙 …… 45
編集後記 …… 47

－表紙について－

表紙の写真は、現在入れない理学部本館の屋上から撮ったものである。裏表紙はピロティー全景の写真である。表紙の色は、広島大学のシンボルカラーである緑色を採用した。

広島大学総合科学部広報委員会・飛翔編集委員会

我々は何処から来て、何処に行こうとしているのか

－ソウゴウカガクブ18才の冬、歴代学部長おおいに語る－

式部　久（元総合科学部長）	司会：難波紘二（広報委員長）
天野　實（前総合科学部長）	編集：松岡俊二（飛翔編集長）
戸田吉信（総合科学部長）	記録：白川博章（社会科学コース４年）

1974年６月に創設された総合科学部はいま、統合移転・大綱化という厳しい冬を迎えている。誕生から18年半、この間1860名の卒業生を送り出し、また生物圏科学研究科や社会科学研究科国際社会論専攻等の大学院も整ってきた。1993年春には19年間の千田キャンパスを去り、東広島市の西条キャンパスで新しい学部の歩みを始める。この機会に、総合科学部の足跡を振り返り、学部の将来を考えてみるべく、歴代学部長の座談会を行った。なお、是非ご出席をと考えていた初代学部長・今堀先生は、去る10月９日亡くなられた。貴重なお話を伺う事が永遠に不可能になった。謹んでご冥福をお祈りします。

◎我々は何処から来たのか－学部創設の頃－

難波　総合科学部が創設されてから18年半がたち、学部内で当時の経緯について知る人も少なくなりました。最初に式部先生、学部の創設についてお話下さい。

式部元学部長

式部　いやー、18年経ったと言うのは本当に驚きです。つい先頃のような気がするんです。とにかく大学紛争という大きな動きの中で構想され、辛くもまとまり、幸いにも実現したという感じです。紛争の中で一番問題になったのは教養部でした。当初から名称は忘れましたが教養部内に委員会ができ、全学的にも全学改革委員会、のちに基本計画委員会というのができまして、詳しい話はできませんが、教養部を何とかしたい。どうすれば教育的な場として再建できるのか、が検討された。例えば全教官を教養部の教官も含めて文学部・理学部などに配属して、一般教育は一般教育部を設置して、いわば出向してやるという案も出ました。

難波　それはもう解体論ですね。

式部　そうです。しかし、一般教育はしんどい仕事、難しい仕事なんです。先生方が好んでやる仕事ではない。それを出向の形では到底できないだろう。やはり責任主体をはっきりさせて改革を考えなくてはいけない。そういうことで最終的に現在の総合科学部案、つまり、固有の学生を持った学部でありながら、同時に一般教育の責任を担うという構想ができてきたわけです。だから私は一般教育問題に対する一つの積極策であり、それが文部省に腰を上げさせた最大のファクターになったと考えています。文部省が教養部を全国的につくったのはそんなに古くないんです。その教養部をつくった矢先に今度は教養部が問題だと言われ出した。しかし、そこからどうやって脱出すればいいかという方策をほとんど持っていなかった。そこへ広島大学から教養部を母胎にした新しい学部構想がでてきたのです。

難波　北海道大学は最後まで教養部をつくりませんでしたね。

式部　ええ。北海道大学は分属方式でしてね。

これは同じ学部の中にファーストクラス・シティズンとセカンドクラス・シティズンが同居しているわけです。そういう方向ではなく、総合科学部という構想をとった訳です。しかし、最大の障害は学内でした。他学部を説得することに私達は大部分のエネルギーを使いました。

難波　学内では教養部解体・分属案と教養部の学部昇格案とがあって、教養部の側は学部昇格案で他学部を説得してまわったということですか。

式部　いや二者択一ではなくて、最初に私がいった一般教育部案というのは、案としては印刷されたんですが、これをバックアップする人はそれほどいなかった。早く消えたんです。問題は総合科学部のような学部を作って機構を変えると、教養課程の学生をどこが面倒をみるのかということ、その重荷が旧来の専門学部に来るんじゃないかと。それに対する非常に強い抵抗があった訳です。だからそれにたいしては評議会の中に一般教育・教養部問題小委員会といいましたか、当時の飯島学長がつくってくれましてね、だから飯島学長のバックアップが大きな力になった訳です。そして我々はチームを編成して全学部に説得に行った訳です。これこれこういうことで、（他学部には）ご迷惑はかけませんて。

難波　（他）学部の負担が増えるということでの抵抗ですね。

式部　ええ。それともう一つは教養部というのは学問領域から言えばベーシック・サブジェクトといいますか、リベラルアーツ・サブジェクトが基本になっているわけです。すると文学部や理学部と重なっているわけです。やはり領域が重なっている部分からの抵抗が、とても強かったです。

戸田　真に『敵はうちにあり』といいますかね（笑）。当時の文章を読んでみますとねぇ、一般教育は従来通りの形でやってほしい、自分達には迷惑をかけて欲しくない、そちらでちゃんとやってくれ、というのがあらゆる所に出てくる。

式部　改革目標との関わりでいえば、二つの主要な機能上の特色を持つわけです。一つは全学の一般教育の責任主体としての新学部。それから旧来の学部教育とは異なった、新しいスタイルの学部教育を行う新学部という、二つの要素を持っているわけです。したがって、一般教育の改革問題は、この学部が基本的に担っていかなければいけない性格であるわけです。

天野前学部長

天野　一般教育ってのはやっぱり高等教育としては要るんだと、そしてつくった学部の理念は間違いなかった。だけど何で大学紛争で盛んに教養部を何とかしなきゃと考えたかというと、これはやっぱりなんとなしに大学の中で教養部の先生の授業というのはつまらん。教養部の一般教育を担当する奴はつまらない奴だという格差が、大学の中であったと思う。それが一体、質で出てきたのか、組織の問題で出てきたのか。組織の問題というのは、20年間近い総合科学部のことを考える上で一番大事だと思う。『初心に帰れ』ということを僕は学部長時代に何回もいったんだけれど、総合科学部を創って頂いたときの理念に帰って、本当に高等教育のなかで一般教育がいかに重要なのかという点を再確認したい。それがよりよくなるためにということで文部省も乗ってきた。

総合科学部・歴代学部長

第 1 代	今堀誠二	S49. 6. 7～S52. 8.31
第 2 代	式部　久	S52. 8.31～S57. 3.31
第 3 代	岡本哲彦	S57. 4. 1～S62. 7.22
第 4 代	天野　實	S62.10. 1～H4. 3.31
第 5 代	戸田吉信	H4. 4. 1～

◎総合科学部の理念をめぐって

難波　天野先生から学部の理念の話がでました。総合科学部創設の理念としましては、広島大学将来計画特別委員会等の作りました『一般教育科目の改革と総合科学部の創設』（1973年）という文章の中で五項目挙げられています。それは、①一般教育と専門科目の一体化、②総合的知見と思考力の涵養、③新しい境界領域の重視、④国際社会の理解、⑤新しいリベラルエデュケーション、です。創設の理念の今日的意義等についてお話下さい。

戸田学部長

戸田　実は７月に自己点検委員会ができまして、学部創設から20年近く経った現在、学部理念は創設当時の表現のままでいいのか再検討しているところです。根本的な理念として、『一般教育と専門教育の一体化』があります。今あらゆる大学改革の方向が専門と一般の区分撤廃が前提になって進んでおり、現在の段階で特にこれをうちの学部の理念として掲げる必要があるのかどうか。問題は20年前に主張したことを、一貫カリキュラムの中で生かすべく再検討することです。それから、理念の五番目の『新しいリベラルデュケーション』についても、同様に考えています。一般と専門の枠が取り払われたのですから、旧来の一般教育から真のリベラルアーツに脱皮しなければならない。18年前、私どもが考えましたのは、学問のあらゆる分野が専門化・細分化していくことはやむをえない状況にある、だからこそ広い領域を見直すことが必要なのではないかということ。その状況は18年経ってますます深刻になっております。次に、一学部一学科の意味が本当に実現されているか。例えて言えば、地球環境の問題一つとっても、人文科学と自然科学と社会科学が一緒になってやらなくてはならない領域が要請されているのではないか。その意味で、二番目の『総合性』、三番目の『新領域』という理念は益々重要になっている。それから『国際社会の理解』ということがありますけれど、表現・内容を今少し変えてみた方がいいんじゃないか。つまり、『受動』から『能動』へ、あるいは『受信型』から『発信型』へと、発展させたいと考えています。

天野　私自身、総合科学部を創るときの苦労ってのは知らない人間で、できてから来たんだけれど、何処に魅力を感じて来たかっていうとやっぱりこの二番と三番、『総合的知見と思考力の涵養』、『新しい境界領域の重視』。今までの古いやり方ではやっぱり駄目なんだ。特に外国でいろいろ生活してこられた先生方というのはそれを身にしみて感じてたし、特に『新しい境界領域の重視』っていうこの三番目を標榜する学部なんだっちゅうことに賛同して来た。で来てみたら、やっぱりさっき僕が指摘したかった組織の問題、ノルマは何コマだ、もう、いろんな会議は多いし、チューターの学生の面倒もみなきゃならん。他の専門学部の先生と比べたら非常に条件は悪かったですよね、式部先生。

式部　はい、悪かった。

天野　これがやっぱり変わらなかった。それと統合移転の問題。これは自然科学系の先生には本当に申し訳なかったと思うけれど、『研究室の面積で学問的なアクティヴィティを割ってくれ。アクティヴィティを教官の占有面積で割ったらこれはギネスもんだ』と僕はいつも言っている。だけれど僕が今言いたいことはね、20年近くやったけれど理念っていうのはほんとに間違っていなかったし、これからも継承して益々伸ばしていかなくちゃならん。また、広島大学は総合大学なんだから大学全体として組織の問題も考えて欲しいということも言いたい。

◎総合科学部のあゆみ

式部　教官の定員の点から言いますとね、昭和49年は石油ショックの年ですが、あのとき60名新規の教官定員、しかし実際には、学生

定員増もあって結局80名定員増で発足した訳です。その後は、今度の京都大学にしろ、神戸大学にしてもね、増員らしい増員はないです。だから、皆さん仕事そのものが二重三重になって非常に大変なんだけれど、これだけ教官人員が豊かな大学は教養部を母胎とした学部としては他に例がない。非常に恵まれている。

難波　いま教官定員の話があった訳ですが、学生教育体制、特にコース制についてはどうでしょうか。

式部　細かいことはさておき、学部一本化と言うのが基本的な理念でありますから、学科も一つというのはそういう主旨できているわけです。それに対して、いざカリキュラムを編成するという段になりますとね、私なんかが漠然と考えていたよりは、具体的に出てくるそれぞれのセクションの案は境界性の強い案が多かったように思いますね。もっと学生の選択というものに重点を置いたカリキュラム編成にならないかと思うんですけれど。どちらかというと、これだけは必修だというものが前面に出てくるという印象を受けましたね。

天野　それは特に理科系の場合がそうです。

難波　それは結局、組織には細分化への本能ないし欲求みたいなものがあると思うわけですが、組織的にそれに歯止めがきかない状況があったのですか。

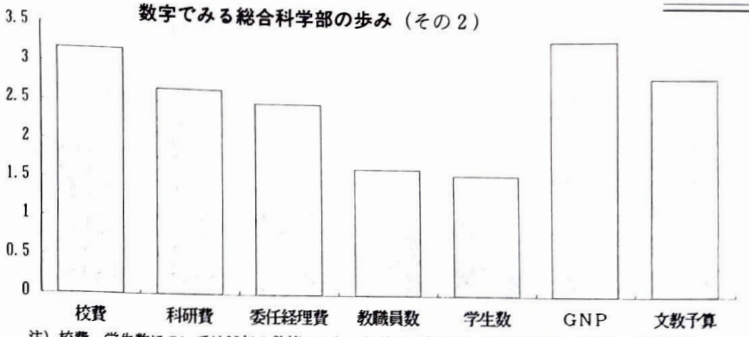
戸田　それはやっぱり学部の最大の目標が膨張政策であったことから来ていると思います。学生増の要求自体は、私は無理ないと思う。しかしともかく、学生定員200名体制に向かって遮二無二いった。そのための戦略としてコースを分けていった。これが最大の（細分化の）原因になった。今しみじみ思うのは、やはり冷めた目を持つ人間が必要だったんじゃないかということです。学部の膨張政策の中で、皆がちょっと酔っぱらったようになっていた。

天野　膨張政策についていえば、200名にしたいと思い、それには何か変えなきゃいかんとなった。それで結局、理系は２コースを４コースにしよう、文系も２コースから３コース、そして４コースへとなったのです。だから学生の教育カリキュラムとしては理想的ではないですよ。だけどやっぱりなんか増やさないかんということで、戸田先生が言われたある意味の『酔っぱらい』。で、僕は初心に帰って、本当に一学部一学科という総合科学部の良さっていうのを出していきたい。それが今まで出来てなかったかというと僕は絶対そうじゃないと思う。毎年、文系であれ、理系であれ、卒業生のなかで、非常に面白い人生を歩んでいる学生というのは結構いる。で、文部省のお役人にいろんな例を話すと、『天野先生、そういうのをもっと努力してＰＲして下さいよ。今堀先生、式部先生が努力された芽が、やはりちゃんと出てるじゃないですか』と言われる。

数字でみる総合科学部の歩み（その１）

年度	入学定員	入学者数	（女子）	卒業者数	（女子）	教官・職員計	教官（現員）	職員（現員）
49	120	122	(16)			177	138	39
50	120	121	(43)			185	138	47
51	120	125	(33)			219	160	59
52	120	129	(42)	78	(13)	243	182	64
53	120	127	(35)	101	(39)	278	208	70
54	120	127	(55)	123	(36)	285	219	66
55	120	123	(37)	110	(37)	289	222	67
56	120	120	(39)	122	(36)	285	221	64
57	120	121	(34)	123	(50)	285	223	62
58	120	125	(37)	123	(35)	286	224	62
59	120	126	(38)	120	(42)	287	226	61
60	120	129	(58)	120	(31)	282	224	58
61	140	145	(62)	116	(36)	274	219	55
62	170	186	(69)	114	(34)	282	225	57
63	170	181	(76)	136	(63)	286	231	55
元	170	187	(90)	138	(60)	293	239	54
2	170	192	(88)	170	(68)	291	239	52
3	170	188	(86)	166	(75)	292	241	51
4	180	194	(79)			294	242	52

数字でみる総合科学部の歩み（その２）



注）校費、学生数については92年の数値を74年の数値で、科研費、委任経理費、ＧＮＰ、文教予算については、それぞれ92年を75年で、92年を81年で、91年を74年で、91年を74年で除して伸び率を示した。

◎総合科学部の評価をめぐって

難波　さて、そういう発言が出ましたところで、総合科学部の成果・到達点という話題に入らして頂きたいのですが。

天野　一般的にいって総合科学部の先生は本当に授業も一生懸命やっている。学生は昔と比べるとイージーゴーイングをする学生が多いけれど、中にはすごくいい学生がいる。広島大学全体を考えたときには一般教育担当部局であるという我々の使命というのは、本当に教師冥利につきるという面がある。例えば医学部の学生、100人近くいる中でも本当にいい医者になろう思う学生は必ずいるわけだからね、一般教養でつまらんようになるっつって盛んに言われるが絶対そうじゃない。厳しくやって単位落としてやったら、『ああ、やっぱり勉強せんならん』思って、僕の研究室に遊びに来る学生が出てきて、その子が今ではお金にならん基礎医学をやっとるんだ（笑）。面白いと思ったらね、やっぱり変わるって。ただ総合科学部の教育っちゅうのはやっぱり初心に帰って本当に自分の学問分野の面白さを教える、入学式の時に僕は言ったと思うけど、大学に入ってきたんだから基礎っちゅうのは苦しいけれど、それをちゃんと乗り越えて学問の楽しさってのを分かってくれるような教育を一生懸命やっていくことが大切だと思う。問題は一つだけ、よその専門学部の先生と比べたら、あまりにもノルマが多い。だからあんまり一杯広げてるメニューをね、半分くらいにして一つの授業科目で二人の先生が半分ずつやられても構わない。それで学生にはびっちり！ただ授業を聴いて終わりっちゅんじゃなくて宿題もしょっちゅう出す。この先生のこの授業取ったときには、普通のボケーとしといて単位がとれるというもんじゃない。そういう風な教育者になって欲しい、授業をやって欲しい。それだけです。後は心配ないと思う。

難波　点数を付けますとね、100点満点で天野前学部長はだいたい何点ぐらいをおつけになりますか。総合科学部の18年半の実績に対して。

天野　僕は非常に良い点を与えたいね。80点以上、もちろんＡは付く。

難波　11月６日付けの『週刊朝日』がね、苦しい予算と人員の中で総合科学部は非常に頑張っておるという異例の評価をやっている。こきおろす専門家の栗本慎一郎がね。

戸田　まあねぇ、あの男はともかくとして『週刊朝日』という大きなジャーナリズムに出たということでちょっと関心を持っておるんです。学部の到達点の評価については、私も大筋では天野先生のおっしゃることに賛成なんです。けどね、ただ一つ、この頃じっとみておりまして人事が非常に気になる。公募制はいいんだが、私は主査の積極的努力をもっともっと要求したい。主査がしゃんとした所はいい人事をやっている。一般的に言って最近の人事は少し小粒になっているのではなかろ

うか。私は異色の人事も必要ではないかと考えており、今後は強くこれを要請していくつもりです。

（左より）難波、戸田

難波　これは学部の教官組織の問題になりますからね、あれなんですけどね、学部教育の達成度について主にお伺いしているわけですが。

天野　ちょっと一つ付け加えさせて。戸田先生、今から来年度にかけていろんな会社から求人が結構来ると思いますよ。本当にねぇ、僕が学部長をやった4年8ヶ月の間で、総合科学部の卒業生をぜひうちにほしいという企業、新聞社も含めて、ＪＲも含めて、年々増えてますよ、式部先生。本当に有り難い。前もってとにかくお宅のが是非欲しいといって来るもん。だからね、難波さん、やっぱり幅広くやったことの成果はでている。企業に入って、何かこれやってみろというときに物おじしない。『よし、やってみたろう』ちゅうような気でやる卒業生が、いろんな分野に散らばってるんだろうと思う。

（左より）天野、式部

◎これからの総合科学部

難波　これからの総合科学部はどうあるべきかというのを御三方からですね、簡単に承りたいのですが。

戸田　移転と一貫カリキュラム作成のために粉骨砕身の努力をお願いしていますが、これとは別にこれからの状況はきわめて厳しい。何よりも平成6年度の概算要求は学生定員マイナス10名という形で出すことになりますし、高等教育部会で臨増定員は返却すべしという結論が出ています。200名体制の膨張政策は方向転換せざるを得ない。来年度の概算要求は、学生の増員をともなうものはお断りというお達しが来ております。総合科学部でも、これから人数が減っていくことを覚悟しなければならない。となると今の8コース体制はどうしても無理であろう。これはまた、すったもんだになりますけれども、私としては、コース再編の中で文科系と理科系が一つのコースの中で一緒にやっていけるようなものを考える必要があるんじゃないかという判断をしております。ま、本当にね、いいことのない時代が続く。

難波　いや、総合科学部の歴史でしんどくなかった時代というのはなかったんですから。毎年、年頭の学部長挨拶は『今年は厳しい年になる』、ですからね（笑）。

戸田　そりゃ、そうですね。来年の年頭には何と言おうかな(笑)。しかしね、パイを分け合う時代とパイを出さなきゃいかん時代とではやっぱり質が違うんですよ。

天野　僕は総合科学部の学生に対する今までの教育、学部の理念というのはなんら変える必要がないから『初心に帰れ』と言いたい。大綱化の問題は専門学部の教育と一般教育の乖離をなんとかしなきゃならんというので出てきたのだから、それの初心に帰って欲しい。一般教育と専門教育というのは質が違うけれども、有機的に関連させなきゃならん。それが今までは、組織的面もあったけれども、広

島大学全体として入ってきた学生の一般教育はうちが責任をもってプランニングできるんだから、この際、真剣に大胆にやっていくということを是非具体化して頂きたい。総合科学部では、例えば、これからはコンピューターだというように先取りしたけれども、もっと思い切って、国際性。国際性といったって世界に出て行ったら日本人といわれるより、まず東洋人といわれるんだから、東洋人としてのアイデンティティーを確立できるような教育システムを確立すべきだ。

難波　有り難うございます。式部先生、哲学・倫理学を講じておられた立場から、また学部をお創りになった立場から、是非ご意見をお聞かせ願いたいのですが。

（左より）難波、天野、式部

式部　もう退官して、最近の事情にあまり詳しくないのですが、とにかく広島大学の総合科学部というのは全国的にも非常によく知られた学部でしてね。不幸な事件もありましたけれど、それにもかかわらず、私なんかも大学審議会に席があるわけで、これはやはり、新しいタイプの学部として、つまり一般教育の充実を図りながら固有の学生を持って、総合的な研究教育を推進する学部として、いわば先駆者として非常に注目されているからだと思います。そして評価もある程度のものは得ていると思うんです。ですから僕は、やはり自信を持って先生方やって頂きたいと思います。それからちょっと道徳的になるけども、『小異を捨てて大同につく』というかね。ま、総合科学部は他の学部に比べて仕事が二重三重になりますから大変だろうと思うし、具体的に会議も多いだろうと思います。しかし、当時の私の思いからいえば、論文はいくら厳密に書いてもいいけれども、日常のプラクティカルな議論ではもっとおおらかというか、ゆるやかでいいじゃないか。もっと譲っていいじゃないか。『そりゃ、君に任せる』ってね。とにかくそれで学部を割らずにやって頂きたい。紛争の時期にも非常に厳しい時がありましたけど、私のした仕事で唯一意味のあるのは、学部を割らないできたということ。これは学部が繁栄する基礎ですからね。文系、理系という難しさというか、やはり異質ですよねぇ、ものの考え方が。その異質な先生方が一つに集まってやるということに非常に意味がある。実行には非常に難しいところがあるけれど、大きな所で一緒になってやって頂きたいと思う。総合的な教育というか研究というのは、今の大学制度のなかで非常に重要なことですからね。将来に希望をもっておおらかな気持ちでご努力頂きたい。

難波　本日はお忙しい中を先生方集まって頂いて有り難うございました。

（1992年10月30日、総合科学部長室にて）

総合科学部の主な出来事の年譜

平成４年10月30日

年　月　日	主　な　出　来　事
昭和49．6．7	総合科学部が設置（昭和49年法律第81号）され、総合科学科に日本研究講座、アジア研究講座、ヨーロッパ研究講座、英米研究講座、比較文化研究講座、社会文化研究講座、情報行動基礎研究講座、人間行動研究講座、基礎科学研究講座、自然環境研究講座、英語講座、ドイツ語講座、フランス語講座、中国語講座、ロシア語講座及保健体育講座が設置された。（昭和49年省令第34号） コース・講座は、地域文化（５大講座）、社会文化（１大講座）、情報行動科学（２大講座）、環境科学（２大講座）の４コース・６（各１大講座）講座。
49．7．8	昭和49年度総合科学部入学式（第１回）を行い、学生122名に入学を許可した。
53．4．1	大学院地域研究研究科（地域研究専攻）（修士課程）、大学院環境科学研究科（環境科学専攻）（修士課程）設置（昭和53政令第85号）
53．4．26	昭和53年度大学院地域研究研究科及び環境科学研究科の入学式（第１回）を行い、学生32名に入学を許可した。
60．2．19	大学設置審議会大学設置分科会委員により開設申請中の大学院生物圏科学研究科に対する実地調査が行われた。
60．4．1	大学院環境科学研究科修士課程及び大学院農学研究科修士課程を改組し、大学院生物圏科学研究科（環境計画科学専攻、生物機能科学専攻、生物生産学専攻）（博士課程）設置（昭和60年政令第72号）
60．4．22	昭和60年度大学院生物圏科学研究科（博士課程後期）の入学式（第１回）を行い、学生12名に入学を許可した。
61．2．20	大学設置審議会大学設置分科会委員により、開設予定の大学院社会科学研究科及び大学院工学研究科情報工学専攻に対する実地調査が行われた。
61．4．1	大学院地域研究研究科修士課程、大学院法学研究科修士課程及び大学院経済学研究科修士課程を改組し、大学院社会科学研究科（法律学専攻、経済学専攻、国際社会論専攻）（博士課程）設置（昭和61年政令大70号） 大学院工学研究科に情報工学専攻（博士課程）増設（昭和61文高大161号）
61．4．23	昭和61年度大学院社会科学研究科（博士課程後期）の入学式（第１回）を行い、学生15名に入学を許可した。
62．3．24	大学院環境科学研究科廃止（昭和60年政令第72号）
62．4．1	コース改組により地域文化（５大講座）、社会科学（１大講座）、数理情報科学、物質生命科学、自然環境研究、生体行動科学（４大講座）、外国語（５大講座）の７コース及び保健体育講座（１大講座）となった。
62．7．21	岡本哲彦学部長刺殺事件が発生した。
63．6．27	文学視学委員により、総合科学部の実地視察が行われた。
平成元．4	生体行動科学コースに保健体育講座を含めた。
元．9．30	大学院地域研究研究科廃止（昭和61年政令第70号）
元．10．19	農学視学委員により、大学院生物圏科学研究科の実地視察が行われた。
4．4．1	コース改組（人間文化が新設され、計８コース）

総合科学部の「匂い」は何処へ

洲崎　敏伸（同窓会会長、生体行動科学コース助手）

総合科学部には総合科学部独特の「匂い」があることを皆さんは知っていますか？

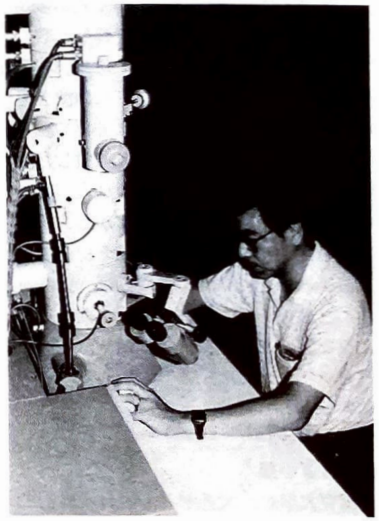
例えば病院には病院らしい匂いがあるように、お寺にはお寺らしい匂いがあるように、総合科学部には総合科学部にしかない匂いがあるのです。大学の古い建物はみなそれぞれに特有の匂いを発しています。しかし、おもしろいことに、ふだんそこに生活している人たちはあまりに慣れっこになってしまっていて、その匂いに気づかなくなっているのです。

総合科学部の１年生や、最近来られた教職員の方々の中には、いちばん最初に総合科学部の建物に足を踏み入れた瞬間に感じたはずの総合科学部の匂いについて憶えている人もいるのではないでしょうか。それは、サビとカビとが混ざり合ったような、いい匂いとはいえないにしてもどことなくなつかしい匂いです。

私も学生の頃は、総合科学部がこのような特有の匂いを発していることに気が付いてはいませんでした。しかし、総合科学部を卒業し、日本を離れて各地を点々とした後、再び８年後に総合科学部の教官として広島に帰ってきた日、広島の街には広島の匂いというものがあるのだし、総合科学部には総合科学部の匂いがあったのだ、ということをはっきり知りました。それは、例えばサケが自分の生まれた川の匂いを知っているように、あるいは自分自身の帰巣本能の一部といってもいいものであったのかも知れません。その匂いは、総合科学部で学んだ学生時代のディーテイルを一瞬にして懐かしく思い出させてくれました。

その後、総合科学部の匂いに再び慣れるのには数日もかかりませんでした。そしてそれから４年近くが過ぎ、今の私にはその匂いを感じることができなくなっているし、それがどんな匂いだったのか、ということすら忘れていきつつあります。しかし、その匂いに対するレセプターのようなものは自分自身の中に確かに存在し続けていることを感じています。

総合科学部の西条移転が近づいてきたこのごろ、総合科学部の匂いはいったいどこに行ってしまうのだろうか、ということがとても気になっています。総合科学部の匂いは、建物と共に千田キャンパスにとどまるのでしょうか。それとも、移転する人々や機材と共に、やはり西条に引っ越して行くのでしょうか。総合科学部を卒業された、あるいは近く卒業されていく皆さんは、何年か後に西条キャンパスを訪れてみて下さい。そして、新しくなった総合科学部の建物の中に皆さんの知っているはずの総合科学部の匂いが少しでも残っているかどうかを感じていただきたいと思います。

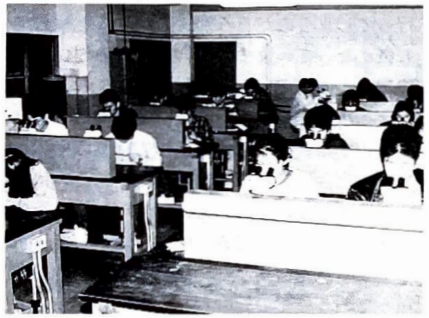


電子顕微鏡をのぞく洲崎先生

東千田キャンパスの思い出

大村　尚（物質生命科学コース４年）

総合科学部発足からちょうど20周年にあたり、我々は慣れ親しんだ千田キャンパスに別れを告げ、新しい西条キャンパスに移転する。西条という田舎に移り住み、広島市の中心という立地条件に恵まれた千田キャンパスを懐かしむ人も多い事であろう。そこで、日頃千田キャンパスについて感じていたことを思いつくままに取り上げ、色あせぬよう留めておきたいと思う。



生物学実験実習風景

人、人、人

千田キャンパスは、とにかく人が多かった。狭くて古い建物のなかに、総科生と数千人の一般教養の学生がいたためである。非常に人口密度が高かった。朝は自転車の置き場所を探さねばならず、人波を掻き分けて教室移動し、食堂で昼食を取るのにも苦労した。休み時間になるとロビーや販売機に人があふれ、終わるとごみが散乱した。しかし、様々な人間に出会え、多くの学生活動の拠点であった。もし、総科生だけだったならば、狭さを感じることはなくても、休日や休業期に見られるような閑散とした雰囲気であったに違いない。総合科学部が、広島大学の中心であることを実感できる場所であった。

うさぎ小屋

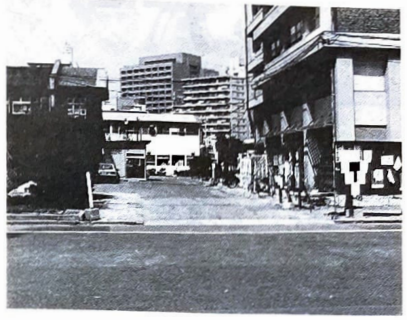
国立大学は、大抵どこも設備が貧弱である。千田キャンパスもその例外でなかったのは周知の事実であり、旧自然棟を見れば明らかであった。薄暗い廊下には、所狭しと実験装置や戸棚が並び、大抵の研究室では、人間と危険物（水素や薬品など）とが同居状態にあった。部屋が狭く、全ての器材を入れると人間が入れなくなってしまうからだ。また、研究室と実験室が分散しているので、実験の度に旧教やプレハブに出向かなければならなかった。研究を行うのに好ましい環境とは言い難いうえ、防災上の危険性も大きかった。しかし、余分なスペースがなかっただけに止むを得なかった。この限られたスペースをいかに効率よく使って実験を行うか、実験屋のもう一つの腕の見せ所である。

○○教官の部屋はどこですか。

来客や、１年生からよく聞かれた台詞である。移転前の総合科学部千田キャンパスは、本館以外に、旧教育学部、旧理学部新館も併用していた。これらの建物に加え、プレハブにも教官室が散らばっていたため、内部配置図は必要不可欠であったが、少なかったように思う。学生には、講義概要に記載して配布されていたが、これとて常に持ち歩くものではなかった。結局、学生も来客も本館や旧教ロビーのもののみが頼りであった。デパート並みにとは言わないが、各フロアのエレベーター前などに一枚ぐらいフロアの配置図があってもよかったのではないだろうか。しかし、ようやく教官室にたどり着けても、教官不在ということも多く、急務のときなどその所在を探すのに苦労したことが思い出される。

階段～エネルギー変換地点

本館は実に複雑な構造をしていた。新自然棟５階に初めて上がる人は、おそらく誰もが迷ったことであろう。これは№40号にもある通り、３度にも及ぶ増築が原因らしい。そのせいか、非常に階段が多かったように思う。新館には２基のエレベーターがあったが利用者が多すぎたため、必然的に階段を使う機会の方が多かった。さて、階段は運動不足の解消にはたいへん効果的だが、足の不自由な人にとっては不便この上ないものである。また、旧自然棟からキャリーで荷物を搬出する際も、直接正面玄関に出ることができなかった。わざわざ、新自然棟のエレベーターを使い北口から遠回りしなければならなかった。機能性が低下していったようだ。はたして、仕事とエネルギーの関係が体験できる良い場所が多かった。

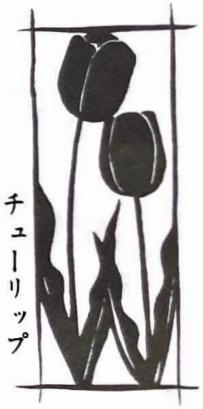


森戸道路から見る

千田キャンパスには、誰もが様々な不満を持ったことだろう。「狭い、汚い、危険」。近年の国立大学に対するイメージを象徴したような場所であった。しかし、私にとって千田の思い出は、決して悪いものではない。狭くて人の多いキャンパスも、うさぎ小屋のような研究室もコミュニケーションには最適の場所だったように思う。研究室の一体感。そして、少し出歩けば様々な分野の人間に出会え、容易に情報交換ができる利便性。狭いキャンパスも、逆にコミュニケーションを密にすることで学際性を最大限に生かせる場所ではなかったかと思う。入学当初は日本一悪いと思っていた環境でも、結局は慣れであり、プラス思考によって愛着が沸く。

千田から西条へ移転することでキャンパスのイメージは、狭くて古いから、広くて（遠くて）新しい（不便な）に変わる。千田と比較すれば、懸案だった研究環境、施設面は（研究費を除いて）改善される。しかし、それ以外に千田から引きずり続ける課題、そして新たな課題に立ち向かわねばならない。学際性の追求、一般教育に変わる新たな基礎教育のスタート、etc.。総合科学のパイオニアとして、我々は西条で第二のスタートを切る。施設は整った。後はこれを活かせる体制造りが必要だ。

環境は、人間によって変えられる。今後、我々の手によって新天地は、どのように開拓されるのだろうか。西条の広大な空間が、千田のような活気のあるキャンパス、そして愛着の沸くキャンパスになることを期待して筆を置く。



チューリップ